

「本已有善」と「本未有善」

とは？

廣田頼道

小僧時代の「行学講習会」のカリキュラムの中で、再三再四「本已有善」と「本未有善」の相違点を教えられた。

教えられた事を、普段の生活で使う言葉で単純に表現させて貰うと。

末法の衆生は釈尊在世の「本已有善」の衆生と違い、釈尊から下種を受けていない「本未有善」の救われ難い衆生だから、末法の教主、日蓮大聖人から妙法を下種されなければ、成仏出来ない衆生なんだ。

こういう趣旨でありました。

つまり、この内容からすれば、

あくまでも仏法の中心は釈尊であつて、末法の衆生は釈尊より在世に下種を受けることの出来なかつた落ちこぼれの衆生だから、釈尊に替わつて、日蓮大聖人より下種を受けなければ救われる事のない衆生である。

こういう解釈になります。どこまでも釈尊と在世が中心の表現であります。これでは、日蓮大聖人の十界曼荼羅本尊を拝み乍ら、釈尊を本仏本尊とし、末法に釈尊の法華経を伝えるメッセンジャーとして日蓮大聖人を日蓮大菩薩と位置づけている身延日蓮宗系の法門と何も変わらない思考回路だという事になつてしまいます。

ああそうなんだと思つて今迄生きてきたけれども、どう考えても、この方程式では釈尊を中心にした仏教の脈絡から日蓮大聖人の仏法へと切り替わる事に矛盾が生じてしまうと考え、ここに素朴な疑問を投げ掛け、日蓮正宗が長年抱えて、混乱を混乱とも思わず得意満面、涼しげに過ごしている点を治療し整理したいと考えた次第であります。

第一に、日蓮大聖人の仏法の根幹は、二祖日興上人が「日興遺誠置文」（学林版4P）の冒頭に掲げられた

「夫れ以れば末法弘通の恵日は極悪謗法の闇を照し、久遠壽量の妙風は伽耶始成の権門を吹き払う。於戯仏法に値うこと希にして喩を曇華の蓋に仮り類を浮木の穴に比せん、尚以て足らざるものか、爰に我等、宿縁深厚なるに依て幸に此の経に遇い奉ることを得たり、随つて後学の為に条目を筆端に染むる事、偏えに廣宣流布の金言を仰がんが為なり。」

の言葉は、明確に釈尊中心の仏教を「伽耶始成の権門」とし、日蓮大聖人の仏法を「久遠壽量の妙風」として「吹き払う」事こそ大事であり、廣宣流布である。末法の衆生に生まれ合わせた事こそ、「宿縁深厚なるに依て幸に此の経に遇い奉ることを得たり」とし、在世・正・像の時代に生まれるよりも、末法にこそ生まれて良かったと示されているのであります。

「本已有善」と「本未有善」の立て分けは、〈本因・本果〉〈文上・文底〉の法門解釈の整理方法として立てられるものであります。

そこで、日寛上人の著述の中で、「本已有善」「本未有善」に関する代表的な御文を少し長くありますが、ここに二つ引用させて頂きます。

〈サイドライン〉
①②③等は筆者の加筆です。

「観心本尊抄文段下」（宗要四279〜281P）

次詳ニ種脱者、此為三段、初略明ニ在末機縁、次明ニ能説教主ニ三明ニ所説法体ニ初略明ニ在末機縁ニ者謂、在世機縁皆是本已有善、衆生也、故疏十云、本已有善釈迦以小而將護之等云、籤十云、故知今日逗会趣昔成就之機等云、証真云、經云、以是、本因縁今説法華經云、故知此経皆為往縁也等云、取要抄云、仏在世於一人無智者無之等云、是則本已有善、故也、末法機縁皆是本未有善、衆生也故疏十云、本未有善不輕以大而強毒之等云、太田抄云、今入三末法、在世結縁者漸々衰微、権実二機皆悉尽、不輕菩薩出、現於世、令擊毒鼓、時也、教行証抄唱法華題目抄等略之、次明能説教

主二者凡熟脱教主必是色相莊嚴尊形也、故經云我以相嚴身光明照三世間、無量衆所尊重為說、實相印等云、文、四云、身相炳着光色端嚴為衆所尊、則可信受云、弘六云、或恐度者心生輕慢、謂、身相不具、不能一心受道、乃至是故、相好自嚴、其身等云、當知熟脱化主、利益本已有善、衆生、若不嚴其身、則所化衆生心生輕慢、有破下種善根之損上、是故莊嚴其身、令所說一心信受、熟脱宿善故、熟脱教主必是色相莊嚴形貌也、若下種教主、利益本未有善、衆生所以逆緣為面、故雖下見外相、心生輕慢、更無破下種善之損上、而却有結逆緣之益上、故不嚴其身、故下種教主、唯是凡身、当体也、止觀第六云、和光同塵、結緣之始、八相成道、以論其終等云、然則種脱形貌文義分明也、本迹約身約位、釈可思之。

問今日、本門寿量、教主唯為脱益、教主亦是下

種教主、耶、若云、亦是下種教主、既色相莊嚴、何是下種教主、耶、若云、但為脱益、教主、既有在世下種之人、謂、發起等、四衆中、結緣衆、豈非在世下種、耶、況、五千起去、類既聞、略開、即為下種、至涅槃經等、即是得脱、況復前文云、於在世、始聞三八品、人天等、或聞二句、一偈、等、為下種等云、迹門尚爾、況復本門乎、故、知今日、寿量、教主亦是下種教主、何但云脱益、教主、耶、答、今日寿量、教主、但是在世脱益教主、非是末法下種教主也、在世下種者、唯是發心下種、非是聞法下種也、當知下種、即有二義、所謂、聞法、發心也、妙樂云、聞法、為種、發心、為芽、是也、此有三重、秘傳、又各有通局也、謂、一、權實相對、証真玄、私記第一云、最初聞法、必是、円教、若論、發心、大小不定等云、文、意、最初、聞法、下種、必是、法華、円教、云、妙樂云、不下、以余經、為種、是也、即是、今家所立、第一、教相也、二、本迹相對、謂、最初聞法、必是、本門、

若論二 發心一 權迹不定也云、即是今家所立第二、
教相也、三、種脱相對謂、最初聞法必是文底、若
論三 發心一 迹本不定也、即是今家所立第三、教相也。
問、最初聞法必是文底、証文如何、答、宗祖云、一
念三千、法門但法華經、本門壽量品、文底秘沈、
給、非一念三千、仏種有名無実也三世十方、諸
仏必妙法蓮華經、五字種、成レ仏給、或演二
說、一乘一以二妙法蓮華經、五字二可レ為二下種二不レ
知二由來一歟等云。

問、若論三 發心一 迹本不レ定、証文如何、答、玄文第
一云、並脱並熟並種番々不レ息等云、妙樂云、
時々世々念々皆有二種等、三相一故也云、疏、第一記、
第一云、既、是世々番々時々念々、有二種熟脱一豈
非迹本不定一耶、当レ知、在世、皆是本已有善、衆
生、何更、可レ論、最初聞法、故、知、唯是發心下
種、若迹門、發心下種、即是熟益、撰屬、若本
門下種、即是脱益、撰屬也、故、今日壽量、教主、但
是在世、本門、脱益、化主、而非、未法、本門下種、教

主二故判二彼、脱此、種也、然、有師不レ知二下
種、兩義、不レ知二兩義、通局、不レ知二三重、秘伝、但見二
在世下種、文二執二彼、脱益、教主、即為二未法下種、本
尊、自、謬、々、レ、他、悲、哉、悲、哉。

③ 三、明三所說、法体三者、問、種脱、法体、應、是、一、体、
其、故、在、世、脱、益、是、化、導、終、譬、如、去、年、秋、一、未、法
下、種、是、化、導、始、譬、如、今、年、春、一、然、以、去、年、
秋、菓、即、為、今、年、春、種、故、菓、即、種、非、菓、與、種
是、別、体、一、唯、以、在、去、年、秋、即、名、為、菓、以、
在、今、年、春、一、名、之、為、種、其、名、雖、殊、其、体
全、同、故、以、在、世、化、導、終、脱、益、一、品、二、半、法、体、即
為、未、法、化、導、始、下、種、法、体、一、何、可、三、種、脱、法、体、異、
耶、答、此、義、不、爾、今、若、仮、譬、且、如、二、田、家、一、脱、
糟、曰、米、不、レ、脱、名、レ、粉、米、以、養、命、粉、即、成、種、
米、如、三、文、上、脱、益、一、品、二、半、一、粉、如、三、文、底、下、種、題、目、
五、字、一、仏、以、レ、米、與、二、在、世、衆、生、一、養、二、法、身、一、惠、命、
以、レ、粉、付、三、屬、本、化、菩薩、為、三、未、法、今、時、種、子、一、故、
云、二、彼、一、品、二、半、一、此、但、題、目、五、字、一、也、若、以、三、糲

米^{ヲゲテ}即為^ハ種子^ト豈可^レ得^ル菓^{ヲヤ} 耶余穀例^{シテ} 爾^カ也、又如^ニ瓜等^ノ瓜^ノ實^ハ不^レ成^ラ種子^ト瓜^ノ核^ハ能^ク成^ル種子^ト瓜^ノ實^ハ如^ク文上脱益^ノ一品二半^ノ瓜^ノ核^ハ如^ク文底下種^ノ題目^ノ五字^ノ瓜^ノ實^ハ能^ク除^ク熱^ヲ潤^ス喉^ヲ故^ニ仏^ハ以^テ一品二半^ノ瓜^ノ實^ヲ与^ヘ在世^ノ衆生^ニ除^キ無明^ノ熱^ヲ潤^ス法性^ノ喉^ヲ瓜核成^リ種^ト能^ク生^ス菓^ヲ故^ニ仏^ハ以^テ妙法^ヲ五字^ノ瓜核^ヲ付^シ屬^シ本^ニ化^ス菩薩^ニ下^ニ末法^ノ衆生^ノ信心^ヲ畑^ニ故^ニ云^フ彼^レ一品二半^レ此^レ但題目^ノ五字^ト也、若^シ以^テ瓜核^ヲ不^レ為^ス種子^ト豈可^レ得^ル菓^{ヲヤ} 耶余菓例^{シテ} 爾^カ也。

ここにおいては

- ① 在末の機縁を明す
- ② 能説の教主を明す
- ③ 所説の法体を明す

この三つを明らかにする為のキーワードとして寛師は「本已有善」と「本未有善」を用いて説明をしているのであります。

分り易い文章ですので、説明に説明を加える必要はありませんが、整理の為、アンダーラインを引く

様な気持で確認すると、

①の在末の機縁を明すの答えとして、「疏十」を引いて

「本未有善不輕以^テ大^ヲ而強^ニ毒^ス之^レ等^云云」

と示し、釈尊中心の「本已有善」から、法中心の「本未有善」を常不輕菩薩の存在を通して示しているのであります。

②の能説の教主を明すにおいても、

「本已有善」は色相莊嚴の本果の仏が教主であり、「本未有善」の逆縁の衆生に対する教主は凡身の当体であることを示し、

「在世^ノ下種^ト者唯是^レ発心^ニ下種^ニ非^ニ是^レ聞法^{下種^ニ}也」

と示し、釈尊を中心に置いた弟子・衆生との機縁によつて起る発心下種と法を中心においた聞法下種の決定的な違いを示しているのであります。

③の所説の法体を明すにおいても、「本已有善」「本未有善」の表現はしていませんが、文章のいわんとしている点は「本已有善」の衆生には一品二半、

「本未有善」の衆生には但題目の五字なりと、相對して破折してゐるのであります。

この様に、日寛上人が「本已有善」「本未有善」の表現を挙げて示された①②③の項目は全て、いかに「本未有善」の末法という時代と衆生が、仏法の源である本因妙の仏法の出現によつて成仏を遂げる縁深き時代と衆生であるかという「本已有善」を破折する為の説明になつてゐるのであります。

次にあげる「開目抄文段」(宗要四328P)

問 若爾末法亦可レ行ニ授受ニ耶、答 就ニ撰折ニ門ニ

古來義蘭菊今且約ニ五義ニ云。

一 者約ニ教法ニ、謂ク論ニ其大旨ヲ法華正是折

伏教法也、是則法華開顯破ニ爾前權理ニ顯ニ法

華実理ニ也、玄文第九廿云、法華折伏破權門理等云、

本迹開顯准例可レ知。

二 者約ニ機縁ニ、謂ク若シニ本已有善ノ衆生ノ以テ撰

受門ニ而將ニ護之ニ、若為ニ本未有善ノ衆生ノ以テ折

伏門ニ而強ニ毒之ニ是故疏第十廿云、本已有善積

迦以レ小ニ而將ニ護之ニ、本末有善不輕以レ大ニ而

強ニ毒之ニ等云。

三 者約ニ、時節ニ、宗祖云、於ニ末法ニ者小大權實顯

密共有レ教、無ニ得道ニ一閻浮提皆為ニ謗法ニ畢、

為ニ逆縁ニ但限ニ妙法蓮華經ノ五字ニ耳例、如ニ不輕品ニ

云、下文云、設山林マジハツテ一念三千、觀ヲコ

ラストモ時機ヲシラス撰折ニ門ヲワキマヘズテバ争

生死離ルベキ云、其外諸文不レ違ニ枚挙ニ云。

においては「本尊抄文段」と同様の説明ですが、特に異なる点は「本已有善」を撰受。「本未有善」を不輕の而強毒之を示し、逆縁折伏と規定している点であります。

この二つの引用を、もう少し分り易くする為に、私なりに「本已有善」を上段に、「本未有善」を下段に、「本已有善」の「本」は……:「本未有善」の「本」は……と、比較して整理してみました。

◎本已有善

本 本は始まり、出発、源という意味となります。

釈迦牟尼仏の源は、本来久遠元初ですが、釈尊一代説法の主体は、釈尊を主人公とした久遠実成の成仏と因縁話であります。弟子、衆生に対しての説法も、五仏同道（総諸仏・過去仏・未来仏・現在仏・釈迦仏の五仏が必ず同じ説法の手順を取る。三世十方の一切の諸仏は衆生を化導するために、まず長期に渡つて諸々の権経を説き、後に出世の本懐として法華経を説き、かりの教えである三乗を開いて真実の一仏乗に帰入させるといふ教化の儀式が同一）の範中で、釈尊自身が法華経を説いても、釈尊は法華経の行者ではなく、弟子、衆生にも法華経の行者としての成仏は説示していない。上行菩薩（四菩薩、地涌の菩薩）の涌出を示し、未来、末法を遠望し、滅後末法に主体を置く為に、久遠元初の説示は無い。よつて在世・正法時代・像法時代の衆生には、久遠元初も久遠実成もなく、仏に成り切つた本果の釈尊に縁することが、釈尊在世の衆生の本（始まり、出発、源）ということになります。

◎本未有善

本 本は始まり、出発、源という意味となります。

本未有善は末法衆生を指した表現ですから、釈尊との縁を切つて上行との縁に切り換ります。釈尊（仏）主人公、中心から釈尊を伝道者、管として、付属された主体の法を中心に切り換ります。つまり、釈尊が説いた法華経（南無妙法蓮華経）ではなく、釈尊が悟つた南無妙法蓮華経（久遠元初の本因妙の法）を一切の諸仏・諸菩薩・森羅万象・一切衆生、平等で同時の、始まり、出発、源ということになります。

天台・妙楽・伝教等は進んでは在世法華経の時にももれさせ給いぬ、退いては滅後末法の時にも生れさせ給はず中間なる事をなげかせ給いて末法の始をこひさせ給う御筆なり

〔撰時抄〕（全集260P）

と、示されるこの恋する主体は、釈尊ではなく、南無妙法蓮華経の法が中心となる末法を指しています。

正像二千年の弘通は末法の一時に劣るか

〔報恩抄〕（全集329P）

本無今有（本無くして今有り。久遠本地をあらわさず、今日の垂迹のみを示す。）

已 は下種ということになります。

釈尊の教化を受けて最後に法華經の説法に縁しても、釈尊の教化に縁する事を下種と考える基本理念では、灰身滅已・煩惱退治による悟りを成仏と理解する事が目的となる。

法華經の行者として生きる姿の成仏は、在世も正法時代も像法時代にも出来ない。

已すでにと表現しても、南無妙法蓮華經の下種ではない。（上行にのみ付属したのだから）釈尊との師弟関係こそが下種と解釈されて、その事を已にと言う。釈尊主の師弟関係は精米した米を釈尊から頂くといい関係。食べて一時は腹が膨れ、一人一人の生命維持は出来るが、個人で終り、一切衆生成仏の他への下種にはつながらない。

法は元々全ての生命に平等に本然としてあるもので仏が発明したもので、仏の所有物・専有物でもない。

未 は、釈尊からの下種がないということになります。

釈尊中心から南無妙法蓮華經根本に切り換えるので、釈尊の縁に未練を持つ必要はありません。

久遠元初本因妙の縁因。末法一切衆生には、元々、正因仏性、了因仏性は、十界互具、一念三千として具っている。

五仏同道の手順もいらぬ。妙法のみ強縁・強折。

上行菩薩に結要付属し、末法一切衆生成仏こそが「每自作是念」の目的。

常不輕菩薩の行体によつて、それ迄の灰身滅已、煩惱退治の成仏を完全に否定。

仏から、何か種を他所から持つて来るか、仏自身が無量に持つていて、それを授けて貰うと成仏するのか。仏に、自分に具わる仏性に気づかされ（縁）法華經の行者として生きる事によつて成仏すると考えるのか。後者でなければ仏と衆生の絶対の平等は、

虚妄になつてしまいます。

仏に成仏させて貰うのではなく仏の生命を元々持つている事に気づかせて貰う事を、敢えて「下種」と表現しているのであります。

常不輕菩薩の

我深敬汝等不敢輕慢

所以者何汝等皆行菩薩道

当得作仏

の二十四文字の法華經の行者としての下種折伏の内容を拝しても、仏の生命に気付かせる事を下種とされているのであります。

この事に関して基本的に混乱があり、本因の土俵で本果を解釈しなければいけないのに、本果の土俵で本因を解釈するということを続け、釈尊か日蓮かという判断に長年混迷している。

釈尊の因行果徳の二法の根本も日蓮の因行果徳の二法も同じ南無妙法蓮華經なのであります。

釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り与え給う。

「観心本尊抄」(全集246P)

有る（成仏が）と言っているが、釈尊との縁が全てで、已に成仏の資格が有ると言うが、無い。

どこまでも釈尊との縁が出発なので、三千塵点劫・五百塵点劫・久遠実成と、どこに始まりを求めても、釈尊との機縁が源であるから、弟子・衆生も個々の機縁による修行で、一切諸仏の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字を根本とする所の成仏は無い。

多聞第一の阿難でさえも法華經根本の成仏ではない。

三千塵点劫を説示した「化城喻品第七」の内容からすれば、大通智勝仏が源で釈尊は16王子の16番目、大通智勝仏から法華經の説法を受けた事により、未來釈迦如来として法華經を衆生に説いたという関係

久遠元初の南無妙法蓮華經を主とすれば、その事を悟られ人法一箇された法華經の行者は、唯一、日蓮しかないのでありますから、日蓮は衆生に仏の生命が具っていることを気付かせる植手。釈尊下種の米は精米。日蓮植手の米は粳つきで、法に叶えば無量無辺の実を永遠に得て、一切衆生に成仏の平等利益を与える種なのであります。

有らず（成仏が）と言っているが、一切衆生には元々仏の生命が具っている。

末法は仏の存在、法の存在さえも信じない法滅、無仏の荒凡夫の時代故に、在世、正法時代、像法時代の釈尊中心の縁は無い。

妙法を基とし、一切森羅万象、平等に妙法の縁を有する。

日蓮は法華經の行者（上行再誕・常不輕菩薩の跡を繼ぐ）の自覚を持ち法華經の行者として成仏することを身を持って示した。

只、単に、仏性を持っているから成仏出来るのではなく、

①南無妙法蓮華經の生命を具し。

なのだから、釈尊を本尊と拝することは間違いであつて大通智勝仏を本尊とするか大通智勝仏が悟つた南無妙法蓮華經を本尊としなければ、根本は無い事になる。

善（成仏） 釈尊の本果を本とし、灰身滅己・煩惱

否定の成仏の為十界互具・一念三千の成仏ではない。

釈尊を中心にした個人個人の機根による成仏の為、一切衆生成仏・永遠常住・不改本位の成仏ではない。

人間だけを対照にした善（成仏）であり、人間以外の生命に対する展開はない。

以上、説明が重複している点もありますが、それぞれ何が「本」で、何が「已」で、何が「未」で、何が「有」で、何が「善」なのか、近年曖昧にされて来たものに対して、敢えて対比・説明を加え、まったく「本已有善」と「本未有善」が次元の違うものである事を提示したわけでありませう。

- ②南無妙法蓮華經の生命に目覚め。下種・折伏
- ③南無妙法蓮華經の生き方をし。
- ④南無妙法蓮華經の仏になる。
- ことを日蓮は説いている。

善（成仏） 南無妙法蓮華經の法を根本とした成仏。

俱出靈鷲山・常在靈鷲山・靈山一会・一切諸仏諸菩薩・一切衆生が絶対平等の一念三千の妙法を根本と確認し合う、永遠常住・不改本位の成仏。

国難を顧みず五五百歳を期して之を演説す乞い願くば一見を歴來るの輩は師弟共に靈山浄土に詣でて三仏の顔貌を拝見したてまつらん

「観心本尊抄」（全集255P）

以上の事から分る様に、日寛上人の著述における「本未有善」は「本已有善」を破折する為に用いた表現であります。

「本已有善」と「本未有善」が「已」と「未」の一字違いの対句の様になっている為、時代が流れ、文字通りの直訳解釈が横行し、譬えば、「南無」を帰依・帰命と解釈せず南に無い、北・東・西にはあ

ると理解しているのと同じ、幼稚にそのままに読まれ、そのままに解釈され、そのままに誤解され、釈尊の下種を受ける事が出来なかつた衆生が末法で日蓮大聖人様から下種されるといふような、「本已有善」「本来有善」の二つをくつつけたストーリーとしての解釈が出来上つてしまつたものと想像出来るのであります。

冒頭に引用した「日興遺誠置文」(学林版4P)

「夫れ以れば末法弘通の恵日は極悪謗法の闇を照し、久遠壽量の妙風は伽耶始成の権門を吹き払う。於戯仏法に値うこと希にして喩を曇華の莖に仮り類を浮木の穴に比せん、尚以て足らざるものか、爰に我等、宿縁深厚なるに依て幸に此の経に遇い奉ることを得たり、随つて後学の為に条目を筆端に染むる事、偏えに廣宣流布の金言を仰がんが為なり。」

の基本姿勢こそが、日蓮大聖人の教えであり、本因妙・文底と称する根底なのであります。

本因の物差しで、本果を計る事は出来ても、本果の物差しで本因を計ることは出来ないであります。にもかかわらず日蓮正宗は、この種の混乱を幾つも、

幾年もして来ているのであります。

最後になりましたが、日寛上人の「依義判文抄」

(宗要六卷144P)に

「末法の衆生は皆是れ本未有善にして最初下種の直機なり」

の御文を引用し、「順縁」と「逆縁」という点について述べたいと思います。

○ 在世・正法時代・像法時代は「順縁の折伏」であり「順縁広布」。

○ 末法は「逆縁の折伏」であり「逆縁広布」。

○ 日蓮大聖人の時代は「逆縁広布」。

○ 私達の時代は「順縁広布」。

という言い方をします。何故こんな事が言えるのでしょうか。

日蓮大聖人の示された法は法華経を依り所として、

十界互具・一念三千の、チリ一つでさえいの生命に至る迄、仏になる事が出来る事を説いた教えであります。つまり「十界至上主義」「凡夫至上主義」森羅万象に十界ならざるものはなし、凡夫ならざるものはなしという教えなのであります。ということは、

爾前の教えの様に、地獄・餓鬼・畜生等の生命を退治し、迷いを無くし、床の間の鑄物の飾りの様に不動・固定化し、一度迷い、心、地獄の心を退治したら、二度と後戻りしないなどという歴劫修行・灰身滅智の教などではないのであります。

ならば「順縁」一度信仰心を持ったならば、二度と不信の心、懈怠の心を持たないという心など、世の中に存在しないのであります。

悟ったり迷ったり、信じたり疑ったり、信行に励んだり怠けたり。地獄界から仏界迄の生命がクルクルと瞬間瞬間に変化する生命の為、逆縁はあつても不変不動の順縁はないのであります。

ならば当然「順縁広布」というのは存在しないのであります。どれだけ「御授戒」を受け「御本尊下附」をされても、迷いの心、地獄・餓鬼・畜生・修羅の三悪四趣の心をなくす事が出来ないということ、順縁は無いということであり、逆縁しかないということなのであります。

それでは、久遠や、五百塵点劫、三千塵点劫、在世、正法時代、像法時代は本当に順縁世界なのかと考えると、譬えば、釈尊の時代においても、阿闍世

王、提婆達多の様な存在がいて、改心すれば「順縁」となり、以後、心の転変がないという事は、物語上はあつても、生身の人間にはあり得ないのであります。一念三千の生命の本質は、どんな時間の変化にも国土の変化にも、その時代の仏の名称や役割の変化にも、何も変わる事はなく、同質なのであります。「五仏同道」の衆生を誘引し導く、方便の論理物語として、「順縁」を示したのであつて、元初より森羅万象の生命は自分自身でも、仏によつても御し難い元品の無明という暗闇を、誰もが抱え持っている存在なのであります。

それでは「順縁」を否定するのか、世界中の人が日蓮大聖人の説いた教えを信ずるといふ目標を投げ捨て否定し、その目標を訴える者をあざけり笑うのかと言われれば、そうではありません。基本的な「逆縁」の世の中であるけれども、悟ったり迷ったり。信じたり疑ったり。信行に励んだり、怠けたり。の瞬間瞬間の順縁の心は、「正直為本」として大切な事であります。つまり瞬間の「順縁」は当然認める事が出来ませんが、森羅万象全ての生命の基礎基盤は「逆縁」なのであります。「逆縁」の中に「順縁」

は生じるが「順縁」の中には「逆縁」は悪であり敵であり、認めてはいけない存在なのであります。「順縁」の中に「逆縁」は同居する事が出来ないが、「逆縁」の中に「順縁」は同居する事が出来るのであります。だからこそ、「化城即宝処」「生死即涅槃」「煩惱即菩提」「九界即仏界」という論理が成立するのであります。

もし、権力者、王様のような存在が、権力、武力、圧政で信心を強要して、国中が南無妙法蓮華經の形の上で信仰者になったとしても、信仰は一人一人が心の底から信じる気持で、法を納得し、歎び、他人にも伝えようという心で信じない限り、信心ではないのであります。信心の団体であるならば順縁の団体のはずであります。しかし好き嫌いにはじまり諍いは無くなりません。逆縁の衆生の集りだからです。妙法を信じたり、迷ったりの中で修行しているからであります。権力、武力での広宣流布は広宣流布ではないのであり、常不輕菩薩の二十四文字の未来に存在する広宣流布とは異質な、法華經の教えによつて否定されてしまうものであります。当然それを順縁広布、一切衆生成仏とは言えないのであります。

す。

私達信仰者は、御授戒を受け、御本尊様を下附されたという事で、自分で自分達を撰ばれし者と想い、買ひ被つていっているのではないだろうか。度し難く御し難い逆縁の衆生だからこそ、妙法に縁する事が出来たと考えるべきではないだろうか。正しい法を信心していれば何をやっても赦される。反対した人間は地獄に墮ちるといふ傲慢な考えで、妙法の縁を断絶させてしまう衆生を産み出して来たのであります。その人達の罪だろうか、私は、正しい信心をしているのだから何をやっても赦されると思つている者の謗法だと考える。

釈尊在世、正法時代、像法時代、末法時代と釈尊中心の釈尊のカリスマ性を中心にして仏教は成立して来ました。「仏教」という言葉も、本来は「仏に成る教」であるにもかかわらず、「仏が説いた教」で「仏教」になつてしまつているのであります。しかし、「正法時代」は釈尊が生きていた時代と見立てて、「像法時代」は、釈尊の像かけを慕つて、「末法時代」は、その釈尊の存在さえも、教えも、信じる事の出来ない衆生がのさばりはびこる時代の事を言う

のであります。正法千年、像法千年、と單純に時間
で区切りますが、その真意は、釈尊を中心にして考
えられて来た教えの基軸が二千年の時間と共に希薄
になり、「末法時代」には、釈尊ではなく、釈尊が
悟った南無妙法蓮華經の源の法の出番が無ければ、
一切衆生の成仏は無いとされているのであります。
この事は、法華經の中で予行演習が示されている
事なのであります。

迹門十四品は釈尊を中心にした在世の教えであり、
一機一縁の授記が成される教えになっています。本
門に移って行くと、授記はなくなり、全体の衆生の
成仏が説かれる様になって来ます。そして、常識的
に考えれば、迹門から本門へ、より本質的な教えが
説かれる様になるといふ事は、因縁説周（下根）↓
譬説周（中根）↓法説周（上根）の順番になってい
かなければならないはずが、現実には、真逆で、法説
周（上根）↓譬説周（中根）↓因縁説周（下根）へ
と移り、下根衆生の成仏が成されてこそ、眞實の正
法であることを示されているのであります。

又、法華經の迹門は釈尊の在世を示し、本門は滅
後を示している事から、迹門は釈尊が主人公、本門

は南無妙法蓮華經の法が主人公なのであります。一
般世間では、南無阿弥陀仏の様に阿弥陀如来を生命
懸けて信じます。なら分るけれど、南無妙法蓮華經
の様に妙法蓮華經の法を生命掛けて信じます。とい
うのは、おかしいと言います。（『梅原猛の授業
仏教』（朝日文庫）229p）はたしてそうでしょうか。
もしそれならば「化城喻品」で大通智勝仏と十六人
の王子の存在が示され、釈尊は過去世十六番目の王
子として、大通智勝仏に南無妙法蓮華經を説かれた
とします。ならば南無大通智勝仏の本尊として拝ま
ないのでしょうか。大通智勝仏は仏、十六王子は子
供でしかない状態であります。この三千塵点劫を明
す場面の大通智勝仏と十六王子を繋いでいる根本は
南無妙法蓮華經の法なのであります。宝塔が涌現し、
釈迦仏、多宝仏が並座した時の繋いでいる根本も南
無妙法蓮華經なのであります。上行菩薩を始めとす
る四菩薩に結要附属されるのも南無妙法蓮華經なの
であります。何もおかしい事はないのであります。
元々、法があつて、人間が悟つて仏になって、まだ
悟れない衆生に、法を悟つて成仏した先輩として教
える。それが仏教であります。だから仏が中心でな

く、法が中心でなければ、仏法は成立しないのであります。まさしく法華経は、「仏に成る教」なのであります。

むしろ、身延系日蓮宗と教えを同根とする人々が、南無妙法蓮華経と唱え乍、釈尊を本尊として拝んでいる事体が、ネジれた矛盾を矛盾とも思わない姿なのであります。

「末法の衆生は皆是れ本未有善にして最初下種の直機なり」

〔依義判文抄〕（宗要六卷144P）

とは、釈尊に一番遠い、末法の衆生が成仏をするには南無妙法蓮華経との直機しかないということであり、仏も南無妙法蓮華経との直機によって仏になったことを示されているのであります。ということとは、末法は、種の中に熟も脱も含み、全てが南無妙法蓮華経の法を根本に、全ての始まり、元初の始動の状態にリセットされる。釈尊を中心に物語られて来た手順の全てを御破算にしなければ、通じない機根の時代になったということなのであります。

元品の無明を抱いている「逆縁」の凡夫の成仏を一念三千の法として主張し、一方で不動、固定、不

退転の「順縁」を主張する事は相入れない矛盾であります。どちらを基底にするかを考えれば、当然「逆縁」しかないのであります。

（以下は、本文の重複部分であり、読み飛ばすことをお勧めします）